

E-K I ZUNAシンポジウム座談会（発言録）

日 時：平成24年10月31日 14時～16時（座談会は15:15～16:00）

場 所：大宮ソニックシティ小ホール

出 演：三菱自動車工業株式会社 代表取締役社長 益子 修様

サッカー解説者 福田 正博様

モータージャーナリスト 竹岡 圭様（コーディネーター）

さいたま市長 清水 勇人

司会

お待たせしました。それでは、これより座談会を開催いたします。出席者の皆様をご紹介します。どうぞ拍手でお迎えください。

はじめに、三菱自動車工業株式会社代表取締役社長 益子修様です。

つづきまして、サッカー解説者 福田正博様です。

さいたま市長 清水勇人です。

最後に、座談会のコーディネーターとして進行していただきます。モータージャーナリストの竹岡圭様です。

以上の皆様で座談会を進行していただきます。それでは、竹岡様よろしくお願ひします。

竹岡

座談会の進行役を努めさせていただきます。わたくし、モータージャーナリストの竹岡圭と申します。よろしくお願ひいたします。

座談会ということで、このまま話をはじめてしまいますと、私の仕切りでは不安ですので、今日はいくつかのテーマを設けてですね、ここにいらっしゃる御三方にさまざまなお話やご意見を伺ってまいりたいと思います。今日のテーマ「エコライフ」ということで、すごく大きなテーマなんですけども、中身を細分化しサブテーマを設定しました。そのサブテーマに沿って進行していきたいと思います。

一つ目のサブテーマですが「EVが走る！」ということで、始めたいと思います。究極のエコカーと言われておりますEVですが、最近街で見かけることも多くなってきました。さいたま市内でも走っていると思います。このEVについて、まず三菱自動車の益子社長から最新の状況も含めまして、お話を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。

益子

よろしくお願ひします。私ども三菱自動車がEVの開発を、どのような考えで行っているのか、ご紹介できればと思います。

自動車というのはアメリカでフォードがT型フォードの量産を始めたのが、今から100年と少し前になります。この100年以上に渡って、世界の自動車産業というのは、自動車を量産して大量に販売し、これと合わせて石油産業も大きく発展していくという、二つのビジネスモデルが成長を続けてきたわけです。最近になって自動車メーカーが抱える課題がありまして、ひとつは自動車というのは大変便利でなくてはならないものですが、一方

で負の側面もあるということで、交通事故ですね。これは新しい様々な技術で徐々に減らせるようになってきました。

あと二つ大きな問題がありまして、一つの課題は環境問題における負の側面。残る一つはエネルギーセキュリティの問題というのがあります。特に、中国やインドなど新興国で自動車の需要が増えていくと、石油の消費量もうなぎのぼりに増えていきます。いずれ40年から50年で石油資源は枯渇してしまうのではと言われておりまして、人類にとって大変大事な石油資源をできるだけ長く使っていくためには、自動車も代替エネルギーが必要であろうと。その場合、環境にも適したエネルギーはないものかと。そういうところから、私どもでは電気自動車を40年以上に渡って研究をしまいいりまして、2009年に電気自動車の量産に踏み切ったという経緯があります。

これまで100年以上続いた非常に大きなビジネスモデルに挑戦するというのですが、こちらのさいたま市さんでは「E-KIZUNA Project」で電気自動車を使っていたりなど、大変感謝しておりますし、徐々に電気自動車に対する理解、環境問題への関心が大きくなってきていると思います。

それと、私どもでは昨年の東日本大震災のときに、電気自動車を緊急に100台ほど支援物資として送ったわけですが、そのときに被災地の方から、この電気自動車に蓄えられた電気を取り出せないのかと、一番つらいのは真っ暗な中で何日も夜を過ごすことだというお話を伺いました。そこで、電気自動車から電気をなんとか取り出しそうということで、1年かけて今年の3月末に電気自動車からの電気で家電などに使えるようにしました。

これからも、車は大変便利で楽しいものですが、一方で負の側面もありますのでそういったものも解決しながらですね、世界の自動車メーカーの競争の中で、日本のメーカーが負けないようにその一翼を担っていきたいと、このように思っております。

竹岡

益子社長、ありがとうございました。お話にありました、ミーブパワーボックス(電気を取り出す機械)ですが、私が聞いたところだと、1日半くらいの電力が供給できるというお話だったかと思いますが、間違いなかったでしょうか。

益子

はい、4人家族ですと1日から1日半くらいは家庭で緊急時には生活ができる電力を供給できます。

竹岡

そのような状況では、普段より節約するわけですから、2日とかでも持ちそうですね。

益子

そうですね、フルに使って1日から1日半ですから、用途を限定していただければ、もう少し持つのではないかと思います。

竹岡

最近、台風や竜巻の発生も多いですから、そういったものがあると安心ですね。ありがとうございました。これからも、そういった非常時に役立つものを開発していただくと嬉しいなと思います。

では、続きまして福田さんにお話をお伺いしますが、福田さんはこの前はじめてEVを体験されたそうですが、その時のお話をお伺いしたいのですが。

福田

はい、1週間くらい前に乗せていただいたんですが、二つ驚いたところがありまして、一つ目は静かだということでこれは乗る前からなんとなく分かってはいたのですが、もう一つはパワーがあるということです。これはびっくりしました。乗ってみて、電気なんでそんなにパワーはないのかと思っていたので、アクセルをちょっと油断して踏んだらですね、グンと加速したので驚きました。乗って見ないと分からないことですし、あそこまでパワーがあるとは知らなかったですね。

竹岡

電気自動車は走らないというふうに思っている方が多いみたいですね。

福田

はい、そういうイメージがありました。ですので思いがけず加速したときは驚きましたね。

竹岡

電気自動車は走り出しに一番大きなトルク(駆動力)を発生しますから。

福田

本当にスムーズでしたし、静かで、試乗後に車外で撮影をしていたのですが、撮影を終わってからもエンジンを切るのを忘れるぐらい、ついているのが分からないくらい静かでした。それと、充電もさせていただきましたが、電気なので充電に対して少しこわいイメージが、感電するんじゃないかと心配しましたが、全くそういう心配もないということが分かったので、非常に安全ですし難しくなかったです。

竹岡

ちょうどスクリーンにアイミーブ試乗の映像が出ていますね。

福田

室内も広がったですね。

竹岡

アイミーブはベース車両(ガソリン車)のスペースをそのまま活かしたパッケージングということで、EV ということでスペースを犠牲にしていませんよね。益子社長いかがでしょうか。

益子

そうですね。ベース車両のスペースをそのまま確保できています。それと、さきほど福田さんが「エンジンを切る」とおっしゃったんですけども、エンジンじゃないんですよ。モーターなんです。

竹岡

私もついついエンジン切ると言ってしまう。ベース車両ではリアミッドシップレイアウトと言って、車体の後ろにエンジンを積んでいることが特長でしたが、このエンジンルームにモーターがすっぽり入っているんですよ。

益子

はい、床下にバッテリーを置きエンジンのあった場所にモーターを積んでいます。

竹岡

福田さん、すごく軽快に走ってる映像ですね。振動も小さかったのでは。

福田

そうですね、静かだということもありますし、振動もほとんど無かったですね。ちゃんと制限速度も守って走りましたから大丈夫ですよ。気をつけないとスピードが出てしまいますね。

竹岡

実は、よーいドンでスタートすると、アイミーブはガソリンのベース車よりも一定速度までは速いんですよ。実際に比べてみたこともあります。映像は、充電しているところですね。

福田

急速充電をしているところですが、市役所に設置してあるものですね。

竹岡

結構簡単にできたのでは。

福田

そうですね、簡単でした。もっと複雑なのかと思いましたが、取出してカチャッとつなげばすぐに充電できました。

竹岡

女性の方だと普段から掃除機や冷蔵庫など電気製品を使い慣れているので、ガソリンよりも恐怖感がないとよく聞きます。

福田

それと、臭いもないですね。ガソリンスタンド行くと最近はセルフも多くて、自分で給油する機会が増えましたがガソリンの臭いがしたり、給油前に静電気除去したり少し怖い気もしますね。充電だとそういう不安はないですね。

竹岡

映像が終了しましたが、試乗して一番感動した点はどこでしょうか。

福田

やっぱり、パワーがあることでしたね。アクセルを踏んだときの感覚は驚きでしたね。

竹岡

最近ではモータースポーツでもEVが活躍していますね。この前は、『パイクスピーク』という山をずーっと駆け上がっていくレースがあって、それにも三菱自動車さんも参加されていました。電気自動車は標高の高い空気の薄い場所でもパワーが落ちないので、そういった場所で活躍しています。

福田さん、ありがとうございました。

それでは続きまして、清水市長にお話を伺いたいのですが、さいたま市さんはEVの普及に積極的に取り組まれてらっしゃると思いますので、そのあたりのお話をお願いします。

市長

はい、それでは電気自動車の普及施策として進めています「E-KIZUNA Project」についてご説明をしたいと思います。このプロジェクトは持続可能な社会の実現を目指し、企業と私たち行政がネットワーク(絆)を結びながら、ステークホルダーとも連携しながら進めていくもので、2009年にスタートしています。

ここにいらっしゃる三菱自動車様をはじめ自動車メーカー5社と協定を結びまして、また先ほど講演いただいた

たイオンリテール様も合わせまして6社と包括的協定を結び、推進しております。

そして、電気自動車については三つの課題があると考えています。一つは、1回の充電での走行距離がまだまだ短いということ。二つ目にガソリン車と比べて価格が高いということ。そして三つ目が、電気自動車についてまだまだ市民の皆様には十分認知されていないことがあります。この三つの課題を解決していこうということで進めているのが「E-KIZUNA Project」になります。

一つ目の走行距離が短いという課題を解決するために行うのが、充電セーフティネットの構築になりまして、現在区役所など公共施設のほか民間事業者様にもご協力いただいて、63箇所73基の充電器を整備しました。スクリーンに出ています、赤い印が急速充電器、緑が普通充電器になります。急速充電器であれば30分程で充電完了となります。

二つ目の価格が高いという課題に対しては、需要創出とインセンティブの付与ということで、ひとつは市でも積極的に電気自動車を導入しようということで、例えば10区に各区のカラーリングを施した青色防犯パトロールカーとして導入し、毎日のように走っています。それから通常の公用車としても導入しており、私も利用しております。また、カーシェアリングも実施していて官民共同で利用するカーシェアリングとなっています。それと、これは全国でさいたま市だけだと思いますが、市役所玄関前にEVタクシーの専用乗場がありまして、市民のみならず、まだEVに乗ったことのない方々に積極的に乗っていただくということで行っています。また、購入の際の補助についても市内事業者・市民のみなさんを対象に行っています。

三つ目に地域密着型の啓発活動ということで、ひとつは三菱自動車様の協力によりまして市内小学校でEV教室というものをやっております。環境問題やEVに関する歴史、誕生の背景など、EVの素晴らしさを勉強してもらいます、しかもEVにも乗ってもらいます。それから商業施設などで試乗会を行うなど、身近な存在にEVをしていこうということでやらせていただいております。

それから、「E-KIZUNA サミット・フォーラム」というものを展開しております。今年第3回目は浜松市で行われる予定ですが、去年・一昨年とさいたま市で実施しました。東日本を中心になりますが、中核市・政令指定都市、県庁所在地が多いのですが、都市の連携ということで急速充電器のネットワークを築いていこうということ、また電気自動車を協力して普及させていこうということで、サミットを開催しております。また、合わせて企業の皆様にも参画いただいて、企業と自治体の連携のあり方などについても議論させていただいております。

このようなかたちで取り組んでおりますが、都市間ネットワークをつくっていくことで走れる距離は短くても、いろいろな都市に充電設備が整備されていれば、乗り継いでいくことで充電をすれば長距離でも移動できるということで、こういったフォーラムを行っていたり、また国に対してもいろいろな要望をしていて、高速道路で料金が安くなる、これは首都高ではすでに導入されていますが、こういった要望などもしております。

竹岡

ありがとうございます。やはりこのような取組はみんなが進めていかないと、広まっていけないですから、新しいパワートレインということで。いま航続距離というお話がでしたが、益子社長、アイミーブは軽自動車ということでシティコミューターという側面が強いかと思いますが、例えばもっと大きなミニバンなどもつくっていかれるご予定はありますか。

益子

アイミーブの後にですね、ミニキャブミーブというものをすでに発売しております。来年の1月からは軽のトラ

ックの電気自動車も発売を計画しております。だんだん電気自動車のラインアップもそろってきます。

竹岡

わたしもミニキャブミーブに乗せていただいたことがあるんですけども、振動が全然ないんですよ。ですから配達する方の体にもやさしいのではと思いますし、配達で街中を走るときに静かで排ガスも出ないですから、環境に対してももちろん、住民のみなさんにもやさしい車であると強く感じました。

益子

先ほど講演でお話いただいたイオンさんですが、品川の方で宅配にですね住宅地に入っていく時に、音とか排ガスを出さないということで、私どものミニキャブミーブを使っていたいております。

竹岡

そうですね、早速ですね使われている事例があるということで、環境にやさしい街ができているということですね。それでは、福田さんにも質問したいと思いますが、実際に EV に乗ってみて、欲しいと思いましたが。ずばりお尋ねします。

福田

欲しいと思います。ただですね、充電の問題というところで、そういった部分がしっかり整備されていけばですね、いいなと思いました。パワーもありましたし、静かですからその点が一番よいところですし。ですから充電ポイントの整備が必要であると。

竹岡

そうですね、今までのガソリン車と乗り替えるとやっぱり不安だなという声をいろいろなところで聞きます。充電ポイントが増えることも必要ですが、冷静に考えてみるとたとえば通勤に EV を使っていれば、会社で充電するというのも可能だと思いますし、そんなに不安になることもないのかなと、用途に合わせて考えればいろいろな展開も考えられるのかなと思います。

それでは、次のテーマに移りたいと思います。二つ目のサブテーマですが「私のエコライフ」ということで、先ほどのホンダさんの講演でもありましたが、これからのエコライフは我慢とか不便とかではなく、日常生活の中でさやかな目標であったり、楽しみとなるものだと思います。お財布にも環境にもやさしいエコライフが身近になってきていると思います。楽しみながらできるということが重要だと思うのですが、「エコライフ」のお話の前に今日ご来場の皆様方ですがサッカーに関しての話題をいろいろお持ちですね。固いお話ばかりではなく、サッカーの話題に振ってみたいと思います。

まずは、清水市長からお伺いしたいと思います。さいたま市は単独市で唯一 J1チームが2チームありますが、いかがでしょうか。

市長

はい、さいたま市はですね全国で唯一の J1チームが2チームございます。こちらの福田さんが在籍された浦和レッズと大宮アルディージャという2チームがあるという、全国で唯一の都市でありまして、サッカーについては以前からサッカー王国と呼ばれてまして、非常に盛んな街です。サッカーの試合がある日は、親子だったりおじいちゃんとお孫さんであったり、真っ赤なユニフォームを着たりオレンジ色のユニフォームを着て、試合時にはスタジアムの周りが真っ赤であったりオレンジ色に染まったり、そういう都市です。ちょうど今、レッズの方は3位ということで優勝争いをしておりますし、アルディージャの方は別の意味で大きな争いをしております。私も

週末はイベント等の出席で、試合会場に足を運ぶことはなかなかできないのですが、いつも両チームの試合の結果を気にしています。

竹岡

なるほど。市長は赤色のユニフォームを着ようか、あるいはオレンジ色にしようか迷うところもあるのでは。

市長

レッズの応援にも行きますし、アルディージャにも行きますし両チームの応援に同じくらい行きます。

竹岡

今日はレッズ色が強いのですが、福田さんは「ミスターレッズ」と呼ばれておりまして、駒場スタジアムでは数多くのゴールを決められていますが、駒場スタジアムでの一番の思い出についてお話をお伺いできればと思います。

福田

1番というとなかなか難しいのですが、駒場というと浦和レッズは初めて優勝した時のスタジアム、決めた試合でありますし、それから J2に降格した時も駒場スタジアムなんです。それで僕が得点王を取ったのも駒場スタジアムですし、そういう意味では全てのシーンが私にとって思い出深いものであって、比べるのは非常に難しいのですが、駒場スタジアムでの一番の思い出ということになると、どのシーンということではなくてやはりスタジアム全体、サポーターが熱狂的なのでそういう方たちと一緒に共に闘ってきたということ。喜びもありましたし、悲しみも一緒に共有してきたという、そういう時間が一番の思い出であると思っています。それぐらい非常に刺激的な、僕は10年間ほとんど駒場スタジアムでやってきましたけど、この間を非常に刺激的な生活を過ごせたと思っていますし、今、現役をやめてですね同じくらいの刺激というのは、なかなか得ることができない。それぐらい強烈な刺激を10年間味わうことができたという意味では、非常に駒場スタジアムというのは思い出深い場所ですね。

竹岡

レッズのサポーターは熱いですね。

福田

そうですね、非常に熱狂的です。硬派な感じですし。サッカーを愛して、浦和という街を愛して、応援するというのが彼らのスタイルだと思いますし、そういう熱というものをすごく感じますし、選手もそれを感じながら共に闘っていくという、一緒に作り上げていくという喜び、そういうものを感じながらサッカーをしているチームだと思いますね。

竹岡

解説される時は、ついついレッズに肩入れしてしまったり、そういうことはないのですか。

福田

肩入れするのではなく、逆に厳しくなりますね。選手も含めいろいろなことを知っていますから、知らないチームや知らない選手は実はあまり厳しいことが言いづらいですね、よく知っているからこそ厳しいコメントなんかも多くなってしまおうと思うので、いつも厳しいですねと選手から言われるのですが、それだけ愛情があるという風に思ってくれるといいんですが、知らないとなかなか確信を持って発言しづらいですから。いろいろな事情を知っているからこそ、思い切ったコメントになりますし、ついつい辛口になってしまうのかなと思います。

竹岡

なるほど。そういった選手たちにですね益子社長、シーズン中なども激励されたりするのでしょうか。

益子

私も、さいたまを中心とした企業の皆様、それと多くの市民の皆様とともに、会社としても浦和レッズを応援しております。昨年はですね大変皆様にご心配をおかけして、申し訳なかったと思っておりますし、もし J2に降格してしまったらどうしようと思っておりました。今年は3位におりますんで、先ほども市長と少しお話したのですがあと残り4試合ありますので、優勝を目指してあきらめずがんばってもらえればと思っております。最近、男子だけでなく女子もですね日本全体で頑張っていますし、浦和レディースの選手たちも頑張っていますので、応援させていただいております。

竹岡

新車発表会にもこの前レディースの皆さんが出られてましたが。

益子

はい、先日ミラーージュという車の新車発表会がありまして、この車大変軽量化に成功した車でありまして、実は福田さんにお目にかかるのは今日が初めてなんですけど、テレビやグラウンドではもう少し大きいイメージがありましたが、実際にはスリムでいらして体幹がしっかりしている、いわゆるアスリートボディですが、このアスリートボディのイメージを新車に採用しまして、浦和レッズレディースの方に発表会に来ていただいて応援をしてもらいました。

竹岡

確かに、ぴったりですね。ミラーージュというと小型ですががっしりとしたイメージがありますので、アスリートのだと思います。実際に乗せていただいてもそう思いました。今、益子社長から女子サッカーのお話がありましたが、福田さん、なでしこジャパンの活躍で盛り上がりを見せていますが、女子サッカーが今以上に強くなるための秘訣などありますでしょうか。

福田

去年、ワールドカップで優勝して、今年オリンピックで銀メダルを取って、ここにきて急激に強くなっていると思うのですが、それによってですね競技人口が増えていく、これはすごく重要なことで。運動能力の高い子がですねほかのスポーツにいかずにサッカーを選んでいくことが重要だと思うんですね。そういう意味では、ワールドカップ優勝とオリンピック銀メダルで非常に注目が集まっていて、実際のところ競技人口も増えています。今年の数字ははっきりわかりませんが、去年でも1000人位増えているんですね。これは女子サッカーにとってとても大きなことですね。これからも増えていくとおもいます。こうして注目されて、競技人口も増えていくということが全体的なレベルアップにつながると思います。

ただ、競技人口が増えてよかったかという点、それだけではダメでその受け皿を用意しなければならないんですね、そういう意味ではやはり環境の整備というのは重要であって、指導者の育成もそうですし、ハードの部分でいえばサッカーをする場所ですね、これは女子だけでなく男子でもいえることなんですけど、Jリーグがスタートしてから今までですね23万人位、競技人口が増えているのですがそれだけサッカーをやる人が増えている、その人たちを受け入れる場所がですね自由に使える施設がないと、競技人口とのバランスが取れなくなってくると思うんですね。そうするとレベルが上がらなくなり、競技人口も増えないという悪循環になります。

サッカーの街といわれている浦和であったりさいたま市なわけですから、もともとサッカーが自由にできる場所を増やしていただきたいと思っています。そういうことができる土地柄であると思っています。

竹岡

そのあたり、清水市長いかがでしょうか。

市長

そうですね、最近では自治体もなかなかお金がないものですから、立派なものにはできないのですがスポーツもできる多目的広場というものをですね、30か所くらいまで増やしたんですけども、いま公園でサッカーやキャッチボールなんかができなくなっていて、子供たちの運動する機会が減ってしまっているということで、子供たちが自由に運動をできる場所をある程度のスペースを確保しまして、スポーツ多目的広場というものにして、それを地元の方に管理していただく形にしていて、こういったものを増やしています。

竹岡

市長はプライベートでもそういった場所に行かれますか。

市長

そうですね、プライベートでももちろん行きますし、仕事でもスポーツ少年団の大会があったりとか、とにかくさいたま市はサッカーをはじめスポーツが大変盛んなので、グラウンドがですね特に土日はいっぱいなんです。これを私たちがいかに多くの人に使っていただいてスポーツ振興、サッカー振興につなげていくかですね、空き地などがあればこういった場所を利用して、増やしていこうと取り組んでいるところです。

竹岡

どんどん増やしていただければ良いと思う方、この会場にもたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

さて、楽しいお話を伺っていますと、テーマを忘れてしまいそうになりますね。テーマ「私のエコライフ」についてですね、皆様が仕事上でもプライベートでも結構ですが、環境に配慮した行動として実践されていることをお聞きしたいと思うのですが、まずは益子社長からお伺いしたいと思います。

益子

昨年、東日本大震災がおきましてですね、福島原発の問題もあって電力の供給についてですね全体が危機に見舞われて、去年は自動車メーカーは全部ですね7月から9月までの間、木金は休んで土日に出勤して電力消費の平準化をやったんですね。その時にですね徹底的に省電力というのでしょうかエコ生活というものを会社でも自宅でもやりましたので、それが今も身につけていて、昔と違って電気はとにかくこまめに消す、コンセントは今まで抜いたことなかったですがすぐに抜きますし、エアコンはできるだけ使わないなど、去年1年間やったことを今年も継続しています。

竹岡

会社でもご自宅でも取り組まれているんですね。

益子

はい、会社でもエアコンの温度は夏は高め、冬は低めにしていますし、エレベーターも全部は動かさないなどいろいろなことをやっています。

竹岡

私も田町(三菱自動車本社)にお邪魔した時、確かにエレベーターは動いてませんでした。益子社長は毎日の

生活のなかでも取り組まれていらっしゃるということでした。

つぎは清水市長、いかがでしょうか。

市長

はい、エコライフというか健康とセットなんですけど、先ほどイオンリテールさんのお話にもありましたが、環境にいいことは健康にもよいことが多いわけですが、一つはだいたいほぼ毎日弁当を持ってきています。お箸もいつもマイ箸を持参しています。あまり食べすぎないように量とカロリーも考えながらですね、またなるべくゴミもださないようにということをやっています。

それと、益子社長からもお話がありましたけど、去年の3月11日以降節電であるとか省エネについての意識がものすごく高くなりまして、できるだけまずはエアコンを使わないようにしようと心がけていますし、以前は人のいない部屋にも電気が付きっぱなしだったものを、今は必ずいなければ消すようにしていますし、家族にも徹底しています。それから、通勤などでもなるべくエレベーターは使わず階段を利用するようにしていて、なるべく歩いて環境にも健康にもいい生活をしようということで行っています。

竹岡

一石二鳥でいいですね。

市長

そうですね、地球にやさしいことは人間にもやさしいと言えるのかなと思います。

竹岡

それでは、福田さんにはですね少し違った観点からお伺いしたいと思うんですが、サッカーの試合では1試合で大量のごみがでるかと思えます。私もサッカー観戦した時に、皆さんが食事された後のごみだとか大量にでるのかと思えますが、これを減らしていくためのアイデアなどがありましたら教えていただきたいのですが。

福田

日本で行われている取組かどうかはわかりませんが、ドイツにですね20年前ぐらいに行ったときに、リユースということなんですけど紙コップではなく、プラスチックの容器に飲み物を入れて販売しているんですね。で、これを返すとお金が戻ってくるというシステムなんですね。要は代金に上乗せしてお金を取り、返すとお金が戻ってくるということなんですね。ドイツでおもしろかったのがですね、帰ってくるお金もそんなに大きな金額ではないのですが、飲み終わった容器を足元に置いておくとですね、試合が終わるころ子供たちが「それをもらっていいか」とまわってくるんですね。こんなに高く積んでですね、それを子供たちがお金にかえていくということなんですけど、それがいいかどうかはわかりませんが、リユースをすることでごみを減らすということで、ドイツはほかの国に先駆けて様々な取組をしていると思えますが、それを見てすごいなあと思いましたし、日本でもできないのかなと思いました。そういう意味では、先ほど市長も言われてましたが、ごみを減らすことは非常に重要なことだと思いますね。

少し話が違いますけど、私の家の近くはカラスがとても多いんですよ、カラスがゴミをつついたりしますんで、そういう意味でゴミの量を減らすことができれば、そういうことも防げるのかなと思いますので、各家庭で個人がそういう意識で取り組んでごみを減らしていかなければいけないと思います。

竹岡

確かにごみを減らしていくことは大変なことですが、個人個人が気を付けないと減りませんからね。先ほどの

ビンのリターナブルの件は昔の牛乳ビンを思い出しますね。

福田

そうですね、子供がたくさん容器を抱えている姿がほのぼのとして良かったです。大人もそれを見てダメだと言わないですから。そういう意味でもうまくまわっているシステムだなと思いました。

竹岡

ドイツ車ではいまだに栓抜きが常備されている車もありますね。

それではですね、時間も少なくなってきましたので最後のサブテーマに入りたいと思います。「次の時代へ」ということで、今後の取り組みやご意見などお伺いしていきたいと思います。それでは、まず益子社長から、三菱自動車さんの今後の展開などお聞かせいただけますか。

益子

環境対応ということをこれからも力をいれていきたいと。先ほど清水市長からも電気自動車の課題というお話がありましたが、値段が高い、航続距離が十分じゃないのではないかと、それとインフラ整備ですね。こういった課題に取り組んでいかなければならないんですが、来年の1月に初めてプラグインハイブリッドEVを出します。これは基本は電気、モーターで走るんですけども、電池の容量が減ってくるとですねエンジンが動き出して、発電してそれを電池に電気を送ってモーターを回します、高速域ではエンジンとモーターと一緒に走ると。これですと1回に、充電していただいてガソリンが満タンですと800キロ以上走りますし、混合燃費という言い方でちょっと難しいのですが、ガソリン1リットルあたりで60キロ以上走りますから、相当燃費がいい車ということになりますし、こうした新しい技術にこれからも挑戦していきたいと思っています。来年1月に出てまいりますので、我々も大変楽しみにしておりますし、ぜひ皆様にもお使いいただければと思っています。

竹岡

スクリーンにパリモーターショーに出展したカットモデルが出ていますけれど、私も拝見させていただきましたが、すごく複雑な制御ですね。

益子

そうですね、まずモーターだけで走って、ガソリンエンジンが動いて発電して、3番目にはモーターとガソリンと両方で走るとい、3つのシステムで動く車なんですね。

竹岡

逆に、いろいろ展開もできそうですし、万が一のですね大震災のような突発的な事故が発生したときにも、いろいろな燃料とか方法で走れるというのは安心感がありますよね。

益子

そうですね、今度はこの車から直接電気を出せるように、今は(バッテリーに貯めた電気を取り出すには)ミープパワーボックスという付属品が必要になっていますが、今度直接電気を取り出せるようになりますので、より利便性が高まると思います。

竹岡

来年の1月がとても楽しみになってきました。皆さまもご期待ください。

続いて、福田さんにお伺いしたいんですけども、福田さんはさいたま市民でいらっしゃるんですよね。そこで、これからのさいたま市に期待することなどありましたら、お聞かせ願いたいと思います。

福田

やはり古い街であるということもあって、道路が狭いということと自転車がですね多く走っていたり、歩道も少なく子供たちも歩道のないところを通学していたり、そういった部分の整備をしていただきたいと思います。逆にですね、そういった部分の整備ができれば、車を運転する側にとっても負担が少ないですし、ロスが非常に少なくなるのかなと思いますので、非常に難しい仕事になるとは思いますが、できればお願いしたいと思います。それと、サッカーに関して、やはりサッカーが自由にできてのびのびと遊べるような環境の整備を、公園でもいろいろなところでいいんですが、安全にできるような場所を提供していただければなと思います。僕は別所なので別所沼公園が近くにあって、非常にいい公園ですけどそういうところが数多くあれば、子供たちも安心してのびのびと生活できれば、それが1番のエコな生活なのかなと思うので、ぜひともそうしていただければなと思います。ちょっと生意気ですけど、言わせていただきました。思い切って、こんな近くで。

竹岡

清水市長、真横で直訴されてしまいましたね。市長からは、さいたま市の取り組みについてお話をお伺いできればと思います。

市長

さいたま市は、冒頭にお話ししました「E-KIZUNA Project」がきっかけになりまして、これからの電気自動車や次世代自動車がスマートハウスやスマートコミュニティに大変大きな役割を果たすということが分かって、その中でさいたま市がこれからも暮らしやすく、活力ある都市として継続的に発展する、環境未来都市というものをつくっていくということで、国の総合特区に指定をいただきました。

これは「次世代自動車・スマートエネルギー特区」というものなんですが、これは大きくいうと三つありまして、一つはハイパーエネルギーステーションですね、後ろのスクリーンにも出ていますけども、ガソリンと水素と電気とそれからガス、これらを1か所ですべて提供できるステーションを100か所整備をしていくと。水素については費用がかかりますので4か所程度ということで、多様な燃料を使う車両にも対応できると。もう一つはスマートホームコミュニティということで、太陽光発電や先ほどホンダさんからも実証実験のお話がありましたスマートハウスと、各家庭で余ったエネルギーをコミュニティの中で消費ができるスマートコミュニティというものを、これから浦和美園周辺で埼玉スタジアムもありますが、進めていき環境未来都市をつくっていくということです。

それから最後は、低炭素型パーソナルモビリティということで、2人乗りの電動アシスト付自転車などを開発したりしてまして、これからの高齢化社会やあるいは子育て中のお母さんがですね、少しでも安全で安心して移動できるような交通手段を実験をしていく、普及をしていくということで、この三つの取り組みをスタートさせています。

ぜひ、こういったことを通じて、この環境未来都市の仕組みをさいたま市から日本中に発信をしていくことが一つですし、またさらにこういったことから経済発展に結びつけていくと、このように思います。

竹岡

職業柄ですね、私はこの低炭素型モビリティというものが気になってしまいますが、このような新しい乗り物が出てきますと、走らせる場所も考えないといけないですね。

市長

そうですね、それはさきほど福田さんからもお話がありましたけども、道路の整備ですね、私たちが考えてい

るのは原付と自転車の間のカテゴリーに分類されるようなモビリティをつくっていこうということで、そういったものが走りやすい環境というものを街づくりのなかでつくっていくことも課題でありますし、それもあわせてやっていかなければと思います。

竹岡

去年の東京モーターショーでもいろいろなメーカーさんから提案がありましたから、三菱自動車さんからもこれからそういった新しい乗り物、電気だけでなくいろいろなものが出てきますので、今後が非常にたのしみですね。

本日はですね、益子社長、福田さん、そして清水市長のお三方からですね、それぞれのお立場からですね大変参考になるお話、また大変楽しいお話を聞かせていただきましてありがとうございました。お時間がきてしまいましたので、この座談会をお開きにしたいと思いますが、ご来場の皆様もですねこれからのエコライフについて、お考えいただくきっかけになったのではないのでしょうか。

皆様ご清聴ありがとうございました。

(終了)